

江湖新聞

第十號



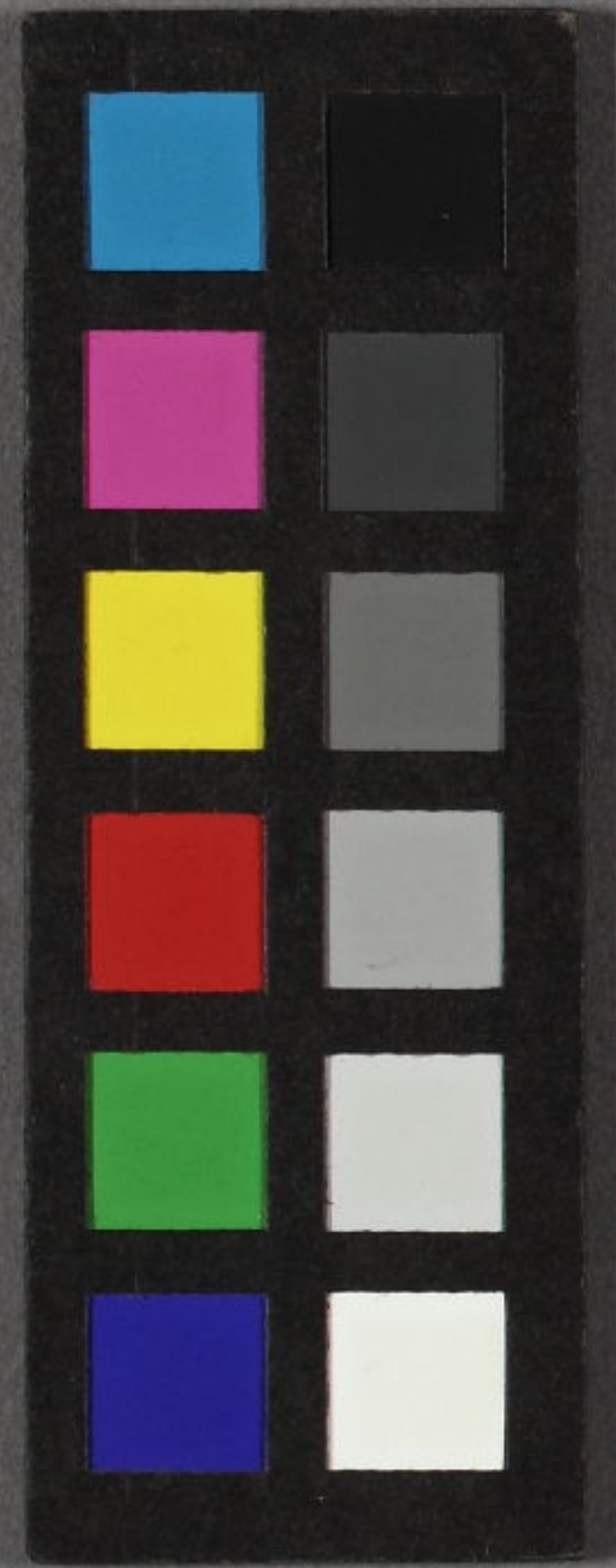
定價八分

西垣文庫

文庫 10

7287

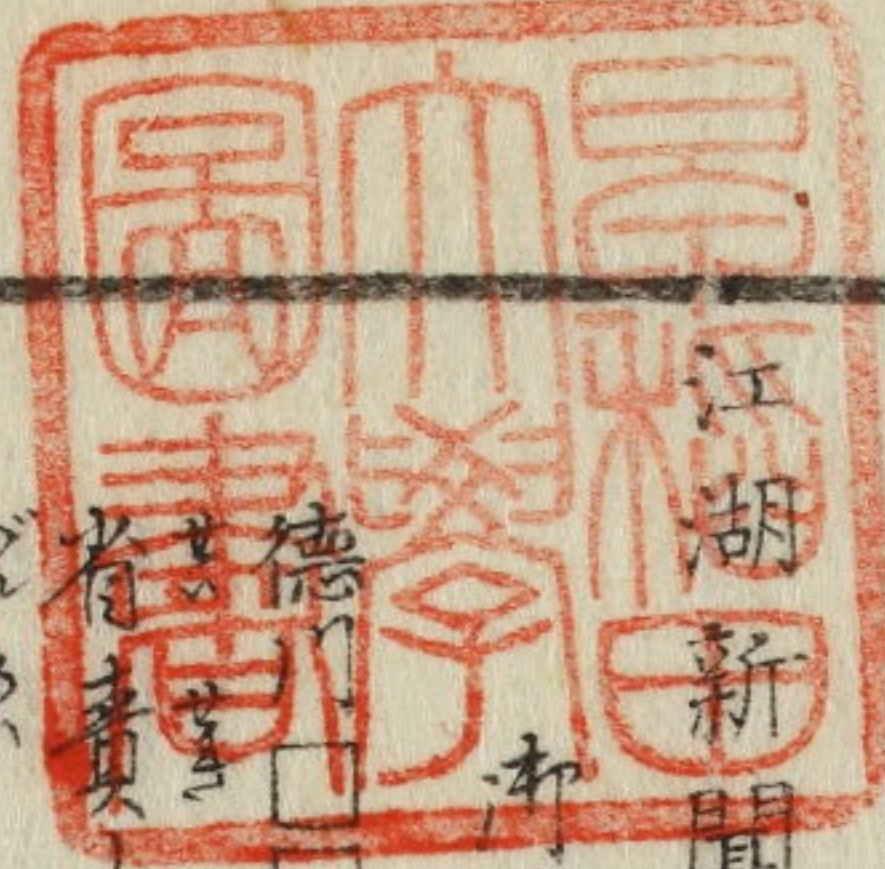
10



特 文庫10  
7287  
10

江湖新聞第十号

慶應四年戊辰閏四月廿日



西田文庫

御家臣より 系部に先出する嘆願書  
 徳川 不測 天譴を蒙りしより以來 昼夜恐懼自ら  
 省責し 彼の受天小父母に号泣する小ひとく一言尾を  
 弁明するあたらず 只官恭順するを祖宗戡定の功を  
 以て開創する所の基業を失ふ小玉れた毫末も悲愴せば偏  
 小兵力足らばくを自屈し 寛を請ふを能へざるに非ざり 君臣上  
 下の倫理を正し 皇天卜萬民をして 皇國の治安を希ふ乃  
 めんが為小其家を捨て 顧みず 皇國の治安を希ふ乃  
 心切なるが故なり 古今史策上小於て此の如き至恭至仁の

江戸二

十一

人として微臣ホ□□の恭順の辨候一今日あつて生で祈り拒命  
 妄執をなさず氣を吞と息を閉ぢ謹慎を奉り  
 挽回を懇祈する外化あり比日□□君臣至徳漸く 天廷へ  
 貫徹し仁厚の 恩詔を賜り感戴不堪と雖も尚又徳川氏  
 の封土を復し後嗣を立てらるゝの 詔を待せば是微臣ホ迷途  
 堪ば萬死を冒して哀訴する所あり仰ぎ頼む  
 皇慈を玄湯ひ辺附毛利廣封父子寸地も削らるゝ官位  
 復舊せし如く至寛至大の 恩典を下さるゝ事  
 聖天子上不在屯天の替りて紀綱を維持し多事公の正大なれ  
 ば微臣厚くして是は為さるゝ 聖断の必らばをさるゝの理なれ

奸邪の黄言 天聴を掠め 恩澤同トくさる事何んか  
 微臣ホ義の仗り□□が寛を祈り徳川祖宗の偉勲せ  
 ざるは治邦の績の廣封が祖元統以下子孫世公の勞と何んか  
 大いなる小なるや彼の父子冠を得るの日 官軍を抗禦し  
 自ら自保の私を為せしと今日□□君臣の行寧小なるにれ  
 恭つと不恭なるや日と同一く編むべからざる義を明あ  
 りし為に至公の 勅裁を乞ひ奉らるゝを得ば是 天啓微  
 臣等が鄙衷を照させぬか小なるにば同志の臣庶忽ち  
 帝閣の邊り 皇國の爲に二三の奸邪を斬戮する後結  
 の臣庶も自屠剔腸一握の熱血を以て 階下小崩き魂魄

七生を加へて以て哀憐を達せんとし愚黷此の如きの際方寸  
 錯亂冒昧唐突非礼の放言を献げ獲れ投下候伏し連徒  
 十族不及と雖も穉を承所ありて練胆誠惶死罪頓首  
 謹言

慶應四年戊辰四月

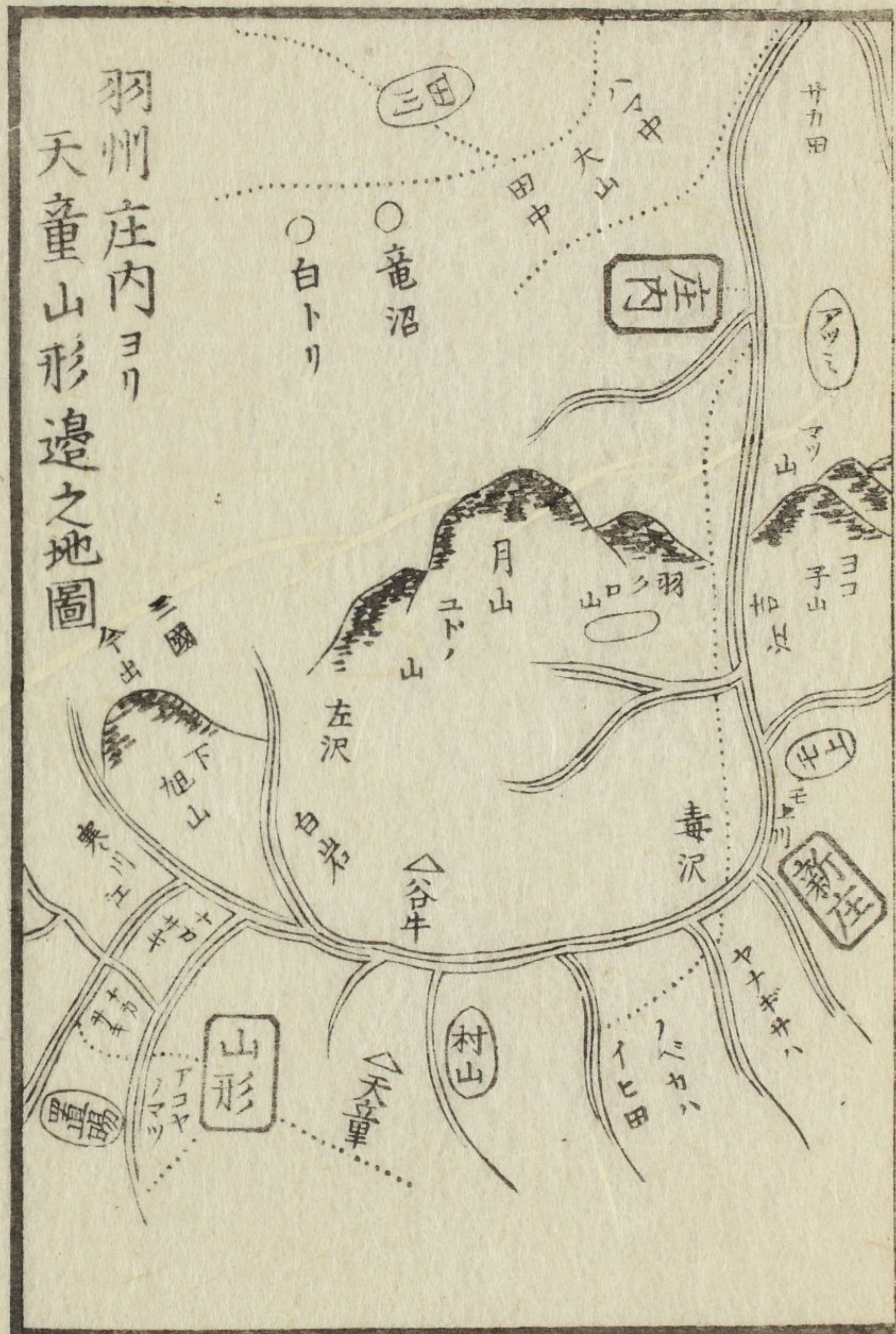
徳川家  
 決死結盟罪臣

右へ上書ハ系師の役中く得る所あり或は曰くとの書由因  
 盟の諸侯より奥羽鎮撫総督へ兵出さし太政官へ出さざりたる  
 りのと文意小披りて傳ふべきはつめも然るべしとあり

○出羽山形より約束の返

四月二日庄内の兵隊惣大将酒井兵林高平八百石副将長原助  
 高平高平軍師加谷孫清助先陣中村清藤高平其餘新徴組とも熟人  
 教九千人羽州天臺へ攻寄せ戦畢く及び天臺城内不敵焼失  
 市中も少く類焼の火はより庄内の兵山形へ押寄せ陣營の爲  
 山形城を借受て後音掛合及び終く戦畢とあり最上川に於て  
 三日の間合戦あり其内官軍方の仙臺の人教退と絶たり澤三佐  
 殿も新庄迄出る跡血戦とお敵嵩山形市中老少の者在方へ  
 至退き壯年の者のお終り一回戸をメめ居る今以合戦最中へ  
 山形へ

宣四月七日



羽州庄内ヨリ  
天童山形邊之地圖

○ 同月十七日箱根より之來快く曰  
 去十二日夕刻脱走方三百人余相物出精々清々上陸箱根  
 野城守付小田原侯人殺六百人討取十六日夜探出右に脱走  
 方は掛合之筋多し河津番(出渡)お集り候

神田之居支配初仕並小栗仁右衛門之届出之面之思  
小栗上野介候去月申預之通土忌迄仍付二月廿八日知行所  
指回村一向々出立土忌迄在交去月廿九日官軍松平右衛門  
板倉之針取松平狭丸人数凡二百人程之倉倉迄探出之者凡  
細日權田村一押寄せ多者者居越上野介父子征伐之候旨  
熱督岩倉殿之下知有之候お違一様又大小炮六之お後首中  
写以有兵器お渡之由且中送下以候有之付將又一候旨候  
て居出首去月二日掛合有之家来三人小共三人召連し翌四日吉  
時迄候へ思様宿務同日熱督より此候渡之候を以て又一  
是召連し家来大小兵上同七日高橋所其以召連し是等之

筋の之を申候委一引連し又一初め家来三人大斬首小共  
三人八人無様官軍の申中後右小共の言候所之候  
指回村より出立上野介安否兼合以交候六日朝四ツ時  
之倉倉迄系にお以て尋之助り之上野介家来三人とも斬  
首し同人家族道具類不様荷造りし何才に候  
お越し首兼り及之候出首前書之始末申渡之候間  
此候以届中之上

同日

小栗上州の平生果斷の人多く公事の爲に私を忘る國家  
之事の際臨之而折檻すは只猶公の性なれば世上の鏡

二月二

十一

往々毀譽相すせり種然その凶報ハ曾國々取りて一個の  
 人物を失つるといふべし且其罪を論ぜば其過を鑿めば  
 直ち其之を殺戮せむといふ事寧く致知すされども人才  
 を惜み忠臣を憐むの意あらずば持て候兆の民庶以愛  
 接し其教を以て其之を失つて公議の所實せんのみ  
 此之議論を論じ匿名の余が新聞局に投書者あり候とくに  
 出

○近郷近在の地帯類考

その事と江戸入りとをいふは

